

第 17 回大会関連

日中社会学会第 17 回大会を終えて

袖井孝子

(大会実行委員長・お茶の水女子大学)

2005年6月11日(土)、12日(日)の2日間にわたって、日中社会学会第17回大会が、お茶の水女子大学で開催されました。前日は雨だったので、看板にビニールをかけたりして大変でした。梅雨時のため、お天気が心配されましたが、幸い天候にも恵まれ、約60名の参加がありました。

特別講演、書評セッション、二つのシンポジウム、3室に分かれての自由報告など、かなり盛りだくさんのプログラムで、中国に対する関心の強さと研究の深まりを感じさせられました。とりわけ若手研究者の活躍には、目を見張るものがあります。ただし、二つのシンポジウムを二日目の午後に入れたのは、時間的に少々きつく、討論の時間が十分に取れなかったことが残念です。

私が定年退職をした後で、手足となって動いてくれる学生が少なく、多数の会員の方々にご協力いただきました。ボランティアとして働いてくださった学生・院生には、心より感謝しております。いろいろ行き届かないところもありましたが、まずまずの成功ではなかったかと思えます。

来年の島根での大会が、盛会であることを心より願っております。

特別講演

永瀬伸子(お茶の水女子大学)

「労働と再生産労働の日中韓比較 お茶の水女子大学COE 北京・ソウル調査から」

松木孝文(名古屋大学)

大会初日は永瀬伸子氏(お茶の水大学)の「労働と再生産労働の日中間比較：お茶の水女子大学COE 北京・ソウル調査から」が幕を開いた。

本報告は北京・ソウル・日本の間にある、男女の家庭内活動と就業行動の差異と類似性を分析するものである。調査データからはソウルと日本が女性の無業化に対して比較的似た傾向を持つことに比べ、北京ではこれら2国とは違った傾向があることが指摘された。これら差異と類似性はそれぞれの国の価値観・労働市場構造・親族ネットワーク、また、各国が根底に共通に持つ儒教文化等と深い関連を持っているという。報告を受けて会場では「膨大な分派を持つ儒教の多様性にも注目してみてもどうか」「階層を強調した分析から分かることはないか」「各国間の家事労働市場の違いは重要なのでは」など、活発な議論が交わされ、数々の重要な論点を確認された。

以上のごとく複数の視角からの論点が提出される一方、一致を見たのが本報告のパネル調査に注がれたであろうエネルギーの膨大さ、調査手法の鮮やかさに対する評価であったことは言うまでもない。おりしも開会挨拶で「自分の足でデータを集める研究」の重要さが再認識されたばかりのことであり、そういった意味でも本報告は本大会の幕を開くにふさわしいものであったといえよう。

書評セッション

中村則弘『台頭する私営企業主と変動する中国社会』ミネルヴァ書房 2005年

唐 燕霞『中国の企業統治システム』御茶の水書房 2004年

司会：黒田由彦（名古屋大学）

本大会の書評セッションで取り上げたのは、中村則弘著『台頭する私営企業主と変動する中国社会』ミネルヴァ書房（2005年）および唐燕霞著『中国の企業統治システム』御茶ノ水書房（2004年）の2冊である。まず両氏に、自著について、最も主張したかったのは何か、また著書で触れることができなかったことでぜひ補足したいことは何か等を語っていただいた。その上で、両氏からお互いの著書に対するコメントをいただき、フロアからの質問も含めてディスカッションを行った。今回の書評セッションのねらいは、変貌する中国社会における企業のうち、「古い」タイプの企業である国有企業と「新しい」タイプの企業である私営企業の新旧二つのタイプの企業に焦点をあてた研究を吟味し、それを通して中国企業の現在を把握するとともに、中国社会の実相に迫ることであった。双方ともに豊富な現地調査に基づいた研究であり、中国社会の実態をヴィヴィッドに映し出す内容である。フロアからも様々な質問・意見等が出され、活発な議論がなされた。司会の不手際もあり、限られた時間内で多岐にわたる論点をすべて消化することはできなかったが、上のねらいはほぼ達成できたのではないかと思われる。ここで改めて、両氏および参加者の皆様にお礼を申し上げる次第である。

一般自由報告 A

神戸真理子（立命館大学）「幾米の『向左走・向右走』から見る中国の社会」

史新田（立教大学）「中国の労働争議と工会の役割」

辺静（お茶の水女子大学）「歴史変動と中年世代のライフコース 北京調査から」

司会：永野武（松山大学）

神戸会員の報告は、ある新奇な現象（台湾の絵本作家・幾米の作品が、「大人が自分のために買って読む絵本」として、中国大陸の若者の間で流行していること）の要因を探り、都市生活における人間関係の希薄さという中国社会の現況を読み取る試みである。研究設計における素材の位置づけや、当該流行現象に関する数値等の根拠についての議論がかわされた。

史会員の報告は、近年の中国における「労働争議」をめぐる諸特徴を、現象面、組織面、法制度の面から明らかにするというものである。中でも、「労働争議」の「局外者」としての工会の役割に焦点があてられ、矛盾点と問題点が描写された。会場参加者の関心も、報告者自身の関心も、「今まで」よりはむしろ「これから」に向けられており、議論もそこに集中した。

辺静会員の報告は、中年世代に対するインタビュー調査結果の一部について、ライフイベント関連図を示しながら行われた。この調査は、歴史変動と個人の人生経験との相互関連の解明という研究目的を、ライフコース・アプローチによって達成しようとする意図で実施されたものである。調査設計や実施の詳細

や、北京という調査地の位置づけ、家族背景という要因も含み込んだ分析・提示への要望など、多くの質問・意見が出され、報告全般にわたる議論が展開された。

一般自由報告 B

馮文猛（東京農工大学）「出稼ぎ労働者の都市定住意識に関する要因分析 2004 年北京・上海の調査より」

出和暁子（中国社会科学院）「健康な都市高齢者活動モデル日中比較 高齢者の活動方法と活動空間から」

石塚浩美（産能大学・お茶の水女子大学）

「中国女性の就業と経済・社会システムの変遷と現状 市場・企業・家庭レベルからみる中国女性の継続就業行動」

変わりゆく都市生活の諸相 出稼ぎ者の定住意識、女性就業、高齢者の活動

司会：松戸庸子（南山大学）

第 1 報告「出稼ぎ労働者の都市定住意識に関する要因分析」(馮文猛氏)は、WTO 加盟による戸籍制度の改正（都市戸口取得規制の緩和）が定住希望の増幅を促している点に着目して、2004 年に北京と上海でアンケート調査（有効サンプル 612 票）を実施した。多変量ロジット回帰分析を用いた結果、出稼ぎ先の土地での定住意識に影響する説明変数として、教育水準、職種、滞在期間、家族構成の 4 要因が有意であるという知見が得られた。経済要因の影響は複雑で、収入額の影響の有意性は今回の調査では統計的に否定されたとするが、今後の課題として経済要因分析の精緻化に努めたいとのことだった。

第 2 報告「健康な都市高齢者活動モデル日中比較」(出和暁子氏)では、北京市（12 名）と東京（9 名）でのヒアリングを通じて、健康な高齢者の退職後の余暇活動や活動空間の特徴を分析した。収入面での余裕がある日本の高齢者の方が自発的で活動範囲も広く、室内活動、商業利用、グループ活動、多彩な趣味実現の性格が強いのに対して、中国の高齢者は元の職場や社区居民委員会（行政末端組織）への依存が相対的に強いなどの特性が指摘された。フロアからはヒアリング対象の数の少なさを指摘する声も上がったように、問題発見的なプリサーベイという性格の報告であった。

第 3 報告「中国女性の就業と経済・社会システムの変遷と現状」(石塚浩美氏)のテーマは、有配偶女性の継続就業行動に対する法や慣行（市場、企業、家庭の 3 レベルから見る）の影響の分析である。歴史的な整理と、2004 年夏に実施した大規模なアンケート調査（2610 サンプル）に基づく計量分析から、継続就業行動の今後の持続可能性、家庭や職場におけるジェンダー差が歴然と存在しており、特に多変量ロジット回帰分析を使った要因分析によって、男女間の賃金格差における性差別構造の可能性を指摘された。

第 1 報告と第 3 報告はいずれも計量分析の手法を使ったものであったが、司会者も含めてフロアに計量分析の理解者が不在で両報告に対する正面からの議論ができなかったのは、報告者に対して申し訳無く誠に残念であった。本学会のレベルアップの一つの方向性が明確になった、という意味では有意義な部会であったと言える。

一般自由報告 C

合田美穂（香港中文大学比較及公衆歴史研究センター）「香港における会館系学校による愛国教育とその役割」

劉暢（神戸大学）「神戸の地域言説における中国人の表象」

宮内紀靖（中国瀋陽師範学院）「中国郷村社会に於ける『私』についての考察 溝口雄三・渡辺浩・水林彪の『私』と『わたくし』を踏えて」

司会：米林喜男（新潟医療福祉大学）

「香港における会館系学校による愛国教育とその役割」と題する報告では、香港における3つのタイプの学校（左派学校、国民政府を支持する学校、植民地政府の教育政策に呼応した学校）の愛国教育が、中国に香港返還後は、いずれも中国大陸に歩み寄りを見せ、ひとつの国家・ひとつの民族としての愛国教育を推進し始めたことが、事例を通して具体的に報告された。

神戸地域の歴史言説における在神中国人 明治期『神戸開港三十年史』を通してと題する報告では、神戸という地域が中国人、とくに中国商人や在留華僑に対して、今迄どういうまなざしをもって接してきたかを、神戸開港三十年史をもとに分析をした結果が報告された。開港当初は、中国商人を批判し、競争・対抗しようとしていたが、日本が近代国家として歩み始めた時期には、厳しく支配管理するとともに差別する態度が現われた。やがて、兵庫、大阪など他地域と競争するようになった神戸の時代になると、再び中国商人を歓迎するようになったという経緯が報告された。

中国郷村社会における「私」についての考察と題する報告では、溝口、渡辺、水林といった碩学の中国における「公」「私」の考察を下敷きとして、中国でも日本でも「私 (si)」「わたくし」は、人間にとって本質的なものであり、「私 (si)」「わたくし」あつての「公」であったことが報告された。

シンポジウム

「現代中国の生活変動 PART Ⅰ」

長田洋司（早稲田大学）「現代中国都市住民の人間関係と社区建設の役割 北京市朝陽区の事例から」

浜本篤史（日本学術振興会特別研究員）

「近代化経験としての『立ち退き - 住み替え』」

司会：飯田哲也（立命館大学）

日中社会学会第 17 回大会の 2 つのシンポジウムの 1 つとして、前年度の上記のテーマを引き継いで「Part Ⅰ」として 2 つの報告がなされた。

第 1 報告は「現代中国都市住民の人間関係と社区建設の役割 北京市朝陽区の事例から」をテーマとする長田洋司会員の報告である。大都市における人間関係についてのフィールドワークによって、調査地

域の特徴を示すことが主な内容であった。現代中国における「社区建設」とは日本語で言えば「コミュニティ形成」とほぼ同じ意味であるが、大都市における近年の人間関係の希薄化にたいして、1990年代から「地域管理政策」も含めた新たな対応が進められるとともに、研究もそれに応じてなされている。この報告は、社区における住民の人間関係の「冷淡化」や好ましくないと考えられる関係などについての先行研究に着目して、現地調査を軸に据えた社区建設を考察したものとして性格づけられる。社区における諸活動（原則・目標も含めて）を具体的に押さえた上での研究として評価できるが、具体的なインタビューが居民委員会関係者に限られていること、報告者自身も認めているように、この地区が企業の単位の居住者であることから一般化するにはさらなる比較研究が必要であろう。なお、ここ10年ばかりの中国においては都市研究・社区研究の成果がかなり公表されているので、それらを踏まえた研究の発展を期待したい。

第2報告は「近代的経験としての『立ち退き 住み替え』」をテーマとする浜本篤史会員であった。危機・老朽住居から近代的集合住宅への立て替え事業＝「危改事業」にともなう変化・問題などを示すことが主な内容であった。いわゆる「危改事業」が始まるのは1990年代に入ってからであるが、住居における近代化政策にともなう諸問題、とりわけ近代化政策過程で浮上してきた「財産権」問題がこのテーマによって具体的に提起されるとともに、新たな課題を投げかけている研究として性格づけられる。政府（あるいは単位）からの住宅供給が当然であったことからの政策転換にともなう矛盾の一端が示されたことにこの研究の意義があると考えられる。私の乏しい知見の範囲では、このテーマそのものを論じている中国文献はきわめて少ないようである。したがって顕著な特徴や具体的事実（あるいは事例）を都市の実態調査研究だけでなく新聞・雑誌の記事から収集してることが、この研究を発展させるにあたっては重要ではないかと思われる。

「ミニシンポ」的性格であるため討論時間が短かったこと、2つの報告テーマがかなり異なる性格であったことなどにより、まとまった討論というよりは質疑応答に終始した。2つの報告は、1990年代後半からの生活変動にともなう新たな状況・問題性を取り上げたものであるが、第1報告は前年度のシンポとの連続性があり、第2報告も都市生活として関連性があると言えよう。そのような意味で、現代中国における強引かつ急速な近代化政策のもとでは今後の生活問題として注目にあたいするテーマに取り組んだ報告といえるであろう。このような都市生活の具体的な研究がさらに継続して取り組まれること、そのための理論・方法の彫琢もまたあわせて追及・議論する必要があると言えよう。

（なお、プログラム等に「part」と誤記されたことをお詫び申し上げます）

シンポジウム

「中国をめぐる社会福祉・社会保障」

陳立行（日本福祉大学）「現代中国の社会保障と社会福祉のあり方について」

城本るみ（弘前大学）「中国における高齢者福祉の現状と課題」

鍾家新（明治大学）「社会保障と 伝統文化 との相乗 / 相剋 急速な近代化・家族変動と
21世紀中国のゆくえ」

松木孝文（名古屋大学）

シンポジウム最初の報告は陳立行氏（日本福祉大学）による「現代中国の社会保障と社会福祉のあり方について」である。本報告は、中国が置かれた条件に応じた独自の福祉モデル構築の必要があると指摘する。さらにモデル構築に向けた作業として「是正ゾーン」「理想ゾーン」等の類型を提出する。現代中国が抱える問題と今後目指すべき方向を明快に整理した点で本報告はまさにシンポジウムの導入部分であった。

続く城本るみ氏（弘前大学）の「中国における高齢者福祉の現状と課題」は社会福祉問題にとって大きなイシューである高齢者福祉の現状を論じる。参与観察により得られたデータは報告者自身が「整理しきれない」と漏らしたようにまさに膨大なものであり、現在の中国で何が起きているか、それに対して住民が何を感じているかをリアルに伝えるものであった。

最後となる鍾家新氏（明治大学）の「社会保障と伝統文化との相乗／相克」は、中国伝統文化の特徴を説明した上で、それが社会保障制度の整備と運営にいかなる影響を与えるか、逆に伝統文化が社会保障制度に変質した点はいかなるものかを論じる。伝統文化という中国の独自性と社会保障を関連させた議論は先に陳氏が論じた中国独自の社会福祉モデルを考える上でも意義深いものである。

本シンポジウムの終わりには今後も社会福祉領域における研究を継続することが確認された。また、先に見たとおり互いの研究に協力の余地が多く存在することが再確認され、その意味で本シンポジウムは今後会員相互で連携を図る契機を提供したといえる。